



山本史郎, 『名作英文学を読み直す』
 Shiro YAMAMOTO, *Re-reading the English Masterpieces*
 (講談社選書メチエ 492,
 294 頁, 講談社, 2011 年 2 月, 本体価格 1,800 円)
 ISBN: 9784062584937

(評) 宇佐見太市
 Taichi USAMI

日本英文学会の國重純二会長(当時)が「英文学会の活性化について」と題する巻頭言を「ELSJ Newsletter」No. 90 に載せたのは、今から 11 年前(2000 年)のことである。國重氏は、日本の英文学研究界不振の現状を顧みて、「憂慮すべき事象」と認識し、活路を開くべく試案を提示した。最近では言語学者・大津由紀雄慶應義塾大学教授が、編著書『危機に立つ日本の英語教育』(慶應義塾大学出版会, 2009)のなかで、かつては英語学や英米文学を対象とした本流の英文科が今やコミュニケーションの隆盛によってすっかり衰退してしまったと慨嘆する。約 45 年も前の話だが、ジョージ・スタイナー著『言語と沈黙』(Faber & Faber, 1967)に拠れば、英文学の本場イギリスにおいてさえ英文科は停滞気味で、閉塞感が漂っているとのことである。こうした局面を打開するためにはどうしたらよいかと苦悶するジョージ・スタイナー氏は、古典を主とした良書を読むことに尽きると言う。

こうした状況下、日本の英文学界の活性化のために大学人として身命を賭して実践活動に勤しんでいる英文学者がいる。その人の名は、山本史郎、東京大学大学院教授である。山本氏は、日本の英文学研究界が凋落の気配を見せ始めた 2003 年の時点で既に、「テキストの産婆術—物語 J.R.R. Tolkien, *The Hobbit*」(斎藤兆史編『英語の教え方学び方』東京大学出版会所収)を公刊し、その論考のなかで、精緻な文学テキスト読解作業こそが「一つの理想的な英語教育といえるのではなかろうか」と述べ、語学教育は文学テキストを読みとる授業以外の方法では不可能ではないか、と断じた。山本氏のこのような英文学研究に対する姿勢は、2008 年発行の著書『東大の教室で「赤毛のアン」を読む』(東京大学出版会)においても終始一貫しており、「文学研究の脈はまだまだ掘り尽くすことはできない」という確たる信念のもと、「何が文学的コミュニケーションを成り立たせているのかという問いかけは、わたしにはとても魅力的だ」と真情を吐露しつつ、山本氏は、「作品そのものの言語表現を緻密に調べると

いうプロセスをへて論理的に」作者の意図に迫っていきたいと持論を展開している。かつて批評界で一世を風靡したニュークリティシズムやロラン・バルトの「作者の死」の存在を認識したうえで、あくまで山本氏は、英語学の語用論等をも駆使しながら文学テキストに密着し、「作者と読者のあいだ、あるいは読者同士のあいだで」成立する「文学的コミュニケーション」に肉薄していく。

低迷気味の日本の英文学研究界にあって、英文学と英語教育との有機的な融合をみごとにまで日々の授業や公開講座等において実践し、それらの活動成果を活字にして世に問うてきた山本史郎氏は、このたび満を持して、『名作英文学を読み直す』（講談社選書メチエ、2011）を上梓した。

自然科学的な客観的論述を善しとしがちな日本の人文科学の学統は、これまで数多くの国籍不明の英文学研究書を産み出してきた。軸足をどこに置き、誰に向けて執筆しているのが皆目わからないという学術専門書がアカデミズムの世界では主流を占めてきた。日本語で書かれているゆえ、てっきり軸足は日本に置き、日本の読者を対象としたものかと思いきや、何度読み返してもそれが不明であるといった、地に足がついていない不毛きわまりない学術研究論文を私たちはいかにたくさん読まされてきたことか。しかるに山本史郎氏の一連の仕事とは言えば、彼ははっきりと「日本の読者」に向かって、それも主として学術研究者が好むであろうアカデミズムの装いを敢えてかなぐり捨てて、「読者フレンドリー」に徹して、生氣のあるわかりやすい言葉で懇切丁寧に執筆するという態度を貫き通している。とりわけ今回公刊された『名作英文学を読み直す』は、白眉である。

本書の「はじめに」のなかで、「こりゃひとつ英文学を研究してみなければと一念発起してくだされば、こんな嬉しいことはない」と著者は憤み深く述べているが、本書はまさに、現在いくぶん停滞気味の日本の英文学研究界にとっての貴重な生命の水の役割を果たしており、英文学界に新風を吹き込む、まさに起死回生の起爆剤にもなりえている。「日本語ばかりの、縦書きの本」ゆえに英文学研究者の目には、日本の一般読者を対象とした、世間によくある手軽な概説書のように映るかもしれないが、実は本書は、幅と奥行きとがたっぷりとある、重厚な上質の良書である。たとえ少数であれ、今後日本において英文学研究を志さんとする若い世代のエンパワーメントに本書の果たす役割は大きい、と私は確信している。もちろん将来の英文学徒にとってだけでなく、今、英文学研究者兼英語教師として教室で英語の授業を担当している私のような大多数の日本の大学英語教師にとっても本書は、非常に有益であり、自信喪失に陥っている英文学専攻の英語教師に一条の明かりを示してくれている。著者山本氏は、まさしくわれらが救世主である。

私が依頼された書評の掲載誌がディケンズ・フェロウシップ日本支部発行の『年報』ということもあり、大部の本書の中からひとまずディケンズに関する山本氏の叙述に目を向けてみたいと思う。第3章で、『クリスマス・キャロル』(1843)が登場する。‘There’s more of gravy than of grave about you, whatever you are!’というスクルージの台詞を取り上げ、gravy と grave の音の近さから生じるジョークについて、既刊の翻訳書からの訳例を挙げつつ、著者は独自の所見を披露する。原文の意味も音もとりあえず無視しながらも、音が似た二つの日本語を探し出し、日本語のジョークとして通じるものを新たに創造する山本氏は、「何にしても、あんた、＜恨めしや＞より、裏の飯屋に縁があるぞ!」と訳出し、漢字「恨」には「うら」というルビを、また、「飯屋」には「めしや」というルビをふることで、語呂合わせを強調している。そして、それぞれが食べ物と幽霊に関連していなければならないという原作の英文をもきちんと押さえた訳にしている。ディケンズは読者を笑わせようとして『クリスマス・キャロル』を書いたにちがいないという解釈を採る山本氏は、「作者の意図の等価」、「レトリックの等価」そして「効果（読者の反応）の等価」を重要視して、敢えて「意味の等価」と「音の等価」を無視した訳を創出した、と言う。翻訳の要諦は「意味」以上の等価をいかに文学作品の翻訳に反映させていくかということだ、と確信する山本氏の面目躍如たる名訳と言えよう。これらの記述を通して私たち読者は、山本氏の翻訳に寄せる熱い想いははっきりと見て取ることができる。

続いて山本氏は、第7章で『荒涼館』(1853)を真正面から取り上げている。「解釈の解剖学」、すなわち、「文学作品のある一定の表現や構造が、読者の心の中に一定の意味や解釈を生じさせるダイナミズムを明らかにすることが、少なくともわたしにとっては何よりも重要だし、面白い」と語る山本氏は、己の信条に即して作品『荒涼館』の深部に迫ってゆく。「チャンスリーがこの小説の意味の中核にある」と論じたうえで、チャンスリーに言及した過去の5人の批評家（プリムリー、チェスタートン、エドモンド・ウィルソン、エドガー・ジョンソン、Q・D・リーヴィス）の各解釈を列挙し、「エドモンド・ウィルソン以降の批評家たちは、『荒涼館』に描かれたチャンスリーに、……実際に存在した裁判所というより、象徴的な意味合いを読み取ろうとしていることが分かる。しかも、時代が下るほど、より一般的な意味合いをチャンスリーに読み込んでいるのがとても面白い。……まったく同一の対象を解釈しながら、どうしてこれほどまでにその意味合いが変わるのだろうか」と述べ、『『荒涼館』の批評史の中で、なぜこのような大転換が生じたのだろうか？このような転換が起きるに際して、どのようなメカニズムが作用していたのだろうか？—こ

れがわたしの逢着した、大きな疑問だったのである」と続ける。そしてチャンスリーの存在を読者の目の前に鮮明に浮かび上がらせる、たとえばチャンスリーのメタファーとしてのクルックの店や、チャンスリーの感覚的等価物としての霧などに触れ、「比喩が意味を創造し産出している」と詳述した後、山本氏は、「チャンスリーはブラックホール」と言い切る。

チャンスリーは実体が欠如しており、解釈を牽制し束縛する要素がほとんどない空虚な器ゆえに読者はそれを意味で満たそうとするのだと言う山本氏は、物語の中心にブラックホールを捉えるという、このようなディケンズの小説作法の影響を大きく受けた作家として、『変身』（1915）などの寓意的な物語で有名なフランツ・カフカの名を挙げる。そしてさらに、カフカのそのような物語の誕生によって今度はディケンズの『荒涼館』の寓話的解釈に拍車が掛った、と論述する。時代を超えた両作家の不可思議な関連性についての山本氏の犀利な解明は、私たち読者に新たな感興を呼びさまし、英文学研究の面白さに豁然と目を開かせてくれる。これらが、アカデミズムの枠を超えた軽妙洒脱で当意即妙の文体によって伸びやかに綴られているのが心憎い。

ディケンズ以外の他の作家の作品群に山本氏がどのような光を当てているかを順次、検証していきたい。第1章のバーネット著『秘密の花園』（1911）に関して山本氏は、「インターテクスチュアリティ」の観点から作品を解きほぐしていく。この作品には過去のさまざまな文学作品が織り込まれていると主張する山本氏は、具体的には、シャルル・ペローの「まき毛のリケ」（1695）、シェイクスピアの『リチャード三世』（1592）、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』（1847）、エミリ・ブロンテの『嵐が丘』（1847）、ディケンズの『大いなる遺産』（1861）、そしてさらにはイーディス・ネズビットの『魔法の城』（1907）の名をも挙げている。時間の凝固の必然の帰結としての精神の凝固を体現している館の主人クレイヴン像にはディケンズの『大いなる遺産』のミス・ハヴィシャム像という先人がいたという情報を、山本氏は私たちに教えてくれる。「作品と作品との間隙を想像で埋めていくほど楽しいことはない」と述べる山本氏にとっては、インターテクスチュアリティのアプローチこそが文学を学ぶ醍醐味のようなものである。そしてこのアプローチこそ、明治以来の先達の手法である。明治以降の錚々たる英文学者の仕事は、インターテクスチュアリティという用語こそ使わなかったが、和漢洋を問わず、古今東西のありとあらゆる作家・作品を網羅した重厚なものだった。山本史郎氏は、その学統をしっかりと受け継いでいる。

第2章はデフォーの『ロビンソン・クルーソー』（1719）論である。「この物語が書かれた時期が、まさに現代社会につながる消費文化の幕開けと重なり合

っていた」と指摘し、「モノが好きなデフォー」は、同時に、時間と空間の特定に執念を燃やし、細部にとことん拘ったと言い、その逆の、ディテールに関心が無かったジョナサン・スウィフトと比較する。イギリスにおける「小説」誕生の背景が手に取るようにわかる秀逸な章である。

第3章はトルキンの『ホビット』（1937）に関してで、トルキンの「韜晦テクニク」で書かれた難解な作品をどう翻訳するかという秘術を、山本氏は読者に伝授してくれる。「翻訳者自身が分かったからといって、すべてを白日のもとにさらそうとしてはならない。読者に正しい解釈を教えるのではなく、その方向をそれとなく教え、読者が自力でそこにたどりつける言語的なお膳立てをしてあげなければならない」という言説には、これまで数々の翻訳を世に出してきた実績のある山本氏だけに、千鈞の重みがある。

第4章のモンゴメリーの『赤毛のアン』（1908）については、村岡花子の翻訳との比較がひときわ光っている。村岡版『赤毛のアン』が原書の第37章を大幅に簡略化している謎を山本氏は追う。その結論として山本氏は、大人の心の成長というテーマの色合いを薄めてシンデレラ物語に取って替わることによって、日本の若年の読者に理解しやすくさせたいという狙いが村岡にはあったに違いないと、断ずる。文学作品を「読む」という行為の本質に迫る考究である。

第5章は、史実を踏まえつつ、アーサー王伝説にまつわる芳醇な定見を満載した章である。章末の「様々な時代と、時代が紡ぎ出した物語を検証する仕事は興味尽きない。文学研究をめざす者よ、沃野は我らが足下にひろがっている！」という著者の魂の啓培に、私たちは真摯に耳を傾けたい。

第6章は、シェイクスピアの『マクベス』（1606）が、その後、さまざまな演出や表現媒体によってどのように姿を変えていったかを踏査する、示唆に富む論究である。マクベスとマクベス夫人に関する20世紀以前の解釈と、それ以降の解釈との相違について著者は詳述する。そしてさらに、黒澤明監督の映画『蜘蛛巣城』（1957）と蜷川幸雄演出の演劇『マクベス』（1980年初演）にも触れ、黒澤の『蜘蛛巣城』は現代という時間の額縁でかこわれた過去の物語として作られているため無常感が前面に出ているが、それに比して蜷川の『マクベス』は仏壇という額縁に置きかえることによって、過去の時間を封じ込め、現世の生に執着する野心のドラマを生み出したのだ、と山本氏は言う。本章は、著者の私的な観劇体験をベースとした、読む人の心に静かに染みしてくる雄渾な筆致が冴えわたっている。

かつて福田陸太郎氏は、『英語青年』（研究社、1977年3月号）誌上で、サイデンステッカー訳『源氏物語』（1976）を好意的に紹介したが、その時点で

は予測できなかったことを32年後に平川祐弘氏は、「地球化時代の英語学習と『源氏物語』の邂逅」(『諸君!』2009年4月号所収)と題する論考で、『源氏物語』はレイブの文学だという米国人の非難の源はサイデンステッカー訳に依拠しているのではないかと指摘している。これは翻訳の及ぼす影響力の大きさを実感させる秀でた論評である。このことに山本史郎氏は本書で言及してはいないが、翻訳に寄せる山本氏の信条は、すぐれて知の人である平川氏のそれに通底するものがある。

米原万理氏(ロシア語通訳者・作家・エッセイスト)の「文学こそがその民族の精神の軌跡、精神の歩みを記したもので、その精神のエキスである」(『米原万理の「愛の法則」』, 集英社新書, 2007)という至言や、中西輝政氏(国際政治学者)の「英文学への強い関心を抱きつづけてきた近代日本の知識人が、この<イギリスの知恵>には一貫して冷淡あるいは無関心でありつづけてきたのは驚くべきこと」(『国まさに滅びんとす』, 集英社, 1998)という箴言を肝に銘じて生きている大学英語教師の私は、このたびの書評執筆を通じて、山本史郎氏の本書のなかに日本の英文学徒が理想とすべきひとつのありようを見た。リービ英雄や水村美苗が「精神世界の探求をになう専門の言語たる文学言語」(土田知則・青柳悦子著『文学理論のプラクティス』新曜社, 2001)に向き合うのと全く同じ態度で臨む山本史郎氏の労作は、時代の課題をしっかりと受け止めた、まさに言語の研究と文学の研究のみごとな統合である。高邁な学問的精神に支えられ、簡潔にして達意の文章で綴られた本書が、明日の日本の英文学研究界を牽引することを信じてやまない。

